

台湾で開催されたアジア選手権に出場し、2年ぶりに国際舞台の場に立った道場主。そのレース内容は、そして成果は？



＜松澤俊行プロフィール＞

1972年生、44歳。7月のアジア選手権入賞の余勢を駆って、秋のシーズンも若手たちと競り合う気持ち満々で、日々走り続けている。

苦い記憶と思い入れ

前回、2年前のアジア選手権（カザフスタン開催）は個人戦三種目に出場しながら、最高順位は13位。チーム内でも全ての種目で7人中6番手（7番手の選手は不思議なことに毎回入れ替わっていた）、リレーも出場機会なしと、大いに不満が残る遠征でした。周囲が表彰ラッシュとなる中、自分が蚊帳の外となるのは、正直気分が良いものではありません。

雪辱を期して臨んだ今回の遠征、仕事の関係でスプリントは出場できず、ミドル種目のみの出場と決まっていました。（ロングは元々開催されず。）そうした事情から、リレーも選考対象外と決まっており、本人も了解して準備していましたが、正直言えば「コンディションを落とす選手がいたら、遠慮なく取って代わる。その時、周囲も納

得するような成績をミドルで」と狙う気持ちも、かなり強く持っていました。

慣れたスケジュール

台湾への移動は、試合前日午後。宿舎へ到着したのは現地時間の夜11時、スタート12時間前でした。最近土曜日の仕事も多いため、国内の重要な大会でもこのような移動をすることは珍しくありません。「暑い中（日本も暑いのですが、台湾が一層暑いことは言うまでもありません）にいる時間が短くて済む」と前向きにとらえており、到着した時には、疲労よりも「これでレースができる」という安心感と喜びが勝っていました。この感覚も、日本国内で厳しいスケジュールをこなす時とよく似ていました。

熱風の中で

迎えた翌日、真夏の台湾ということであらかじめ予想できた通り、忍耐と粘りが問われる展開となりました。結局、男子アジアチャンピオンを決定するM21Eクラスでは谷川友太選手、松井健哉選手が1位・2位、間に他国の選手を挟んで5位と6位に筆者と新潟大学の高野兼也選手が続きました。「日本、快進撃」と言えますが、近年の実績を考えるとより上位にふさわしい（少なくとも筆者よりは）と思えた日本選手、具体的には尾崎弘和選手や長縄知晃選手が入賞を逃しています。意外な感じもする一方で、日本でも中部以西の地方大会でよく見られる「ヤブのきつい里山での荒れがちなレース」に慣れている選手が生き残った、と見れば頷ける順位でもありました。

尾崎選手、長縄選手は、直後にスウェーデンでの世界選手権を控えており、この時期はスピーディな直進に比重を置いた練習をしていたと思われます。二人が順当に上位を獲得することは、筆者も望んでいたことでした。もちろん、その時は筆者の表彰はなかったこととなります。複雑な気持ちを覚えつつも、もちろん喜びや、務めを果たせた安心感もありました。

ミスも実力の内 ミスこそ実力の塊

複雑な気持ちと言えば、「せつめいから日本選手ワン・ツー・スリーを決めたかった」という悔いとか欲のような感情も、しばらく時間が経った後に強まっていきました。分単位のミスを3回しており、それは防げたような気がしますし、実際、チャンスはゼロではなかったのでしょうか。

しかし、帰国後、真夏の日本で何度かオリエンテーリングをしてみると、やはりこの日と同じように集中力低下による凡ミスをする傾向があることも分かりました。台湾でのタイムは、あの時点での実力を反映したもので、最も確率が高いところに落ち着いたと言えます。

「潜在能力＝真の実力」とは限らないことは、長年の経験から身に染みています。タイムは実力通り、順位は幸運で望外のものだった。そう考えれば納得でき、「荒れる展開ではしっかりと棚ボタを得る。そして荒れない展開でも棚ボタなしで上位を狙える力を付けたい」との意欲も新たになりました。

四半世紀分、若返る

タイムを出しあぐねる選手はいたとしても、大きく体調を崩す選手はなく、秘かに狙っていたリレーへの出場は、やはり実現しませんでした。

しかし、元々若手に一人欠員が出ていたため、特別に日本ジュニアを代表する2人の選手（大田将司選手、宮本樹選手）と同じチームでM20クラスに出場することができました。

「半分にしてもジュニアの制限を超える年齢」の選手が紛れていたこのチームは、もちろん表彰対象外です。ジュニア2人が正選手たちのチームとどのような競い合いになるかを知ることが大事ですから、2人が1、2走を務め、筆者は3走でした。順位を決める走順を任せられ、直前も緊張感を味わうことができました。

しかし、終盤まで競り合っていた時に「日本チームはシニアの選手を使って同じく国の正選手のアシストをした」あるいは「他のチームを攪乱した」と、観ている人（特に他チーム関係者）に思われてはいけません。状況を把握し

て臨機応変な走りをしなければ、という心構えもしていました。

結果的にその心配は杞憂で、優秀なチームメイトたちは、前後の走者の姿が見えない状況で3走まで継いでくれました。そのまま後ろに背中を見せないように、と積極的な走りができましたし、会場付近通過時の声援も気持ち良く受け止めました。次は、同じ声援をM21Eクラスで受けながら、やはり積極的な走りをしたい、と考えています。

時間との闘いもまた楽し

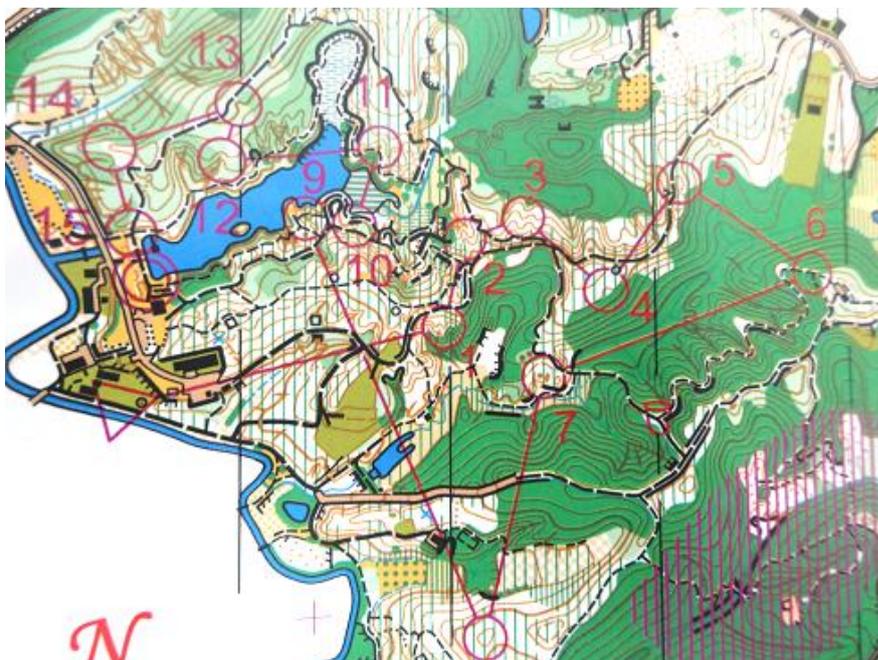
今回のアジア選手権は2年後、開催地は香港。出場意欲はありますが、年々代表入りが厳しくなってくる(きている)ことも自覚しています。それもまた良い刺激、と受け止め、今回のチームメイトたちを意識した(目標にした)取り組みを続けていくことを、ここで宣言しておきます。

参考

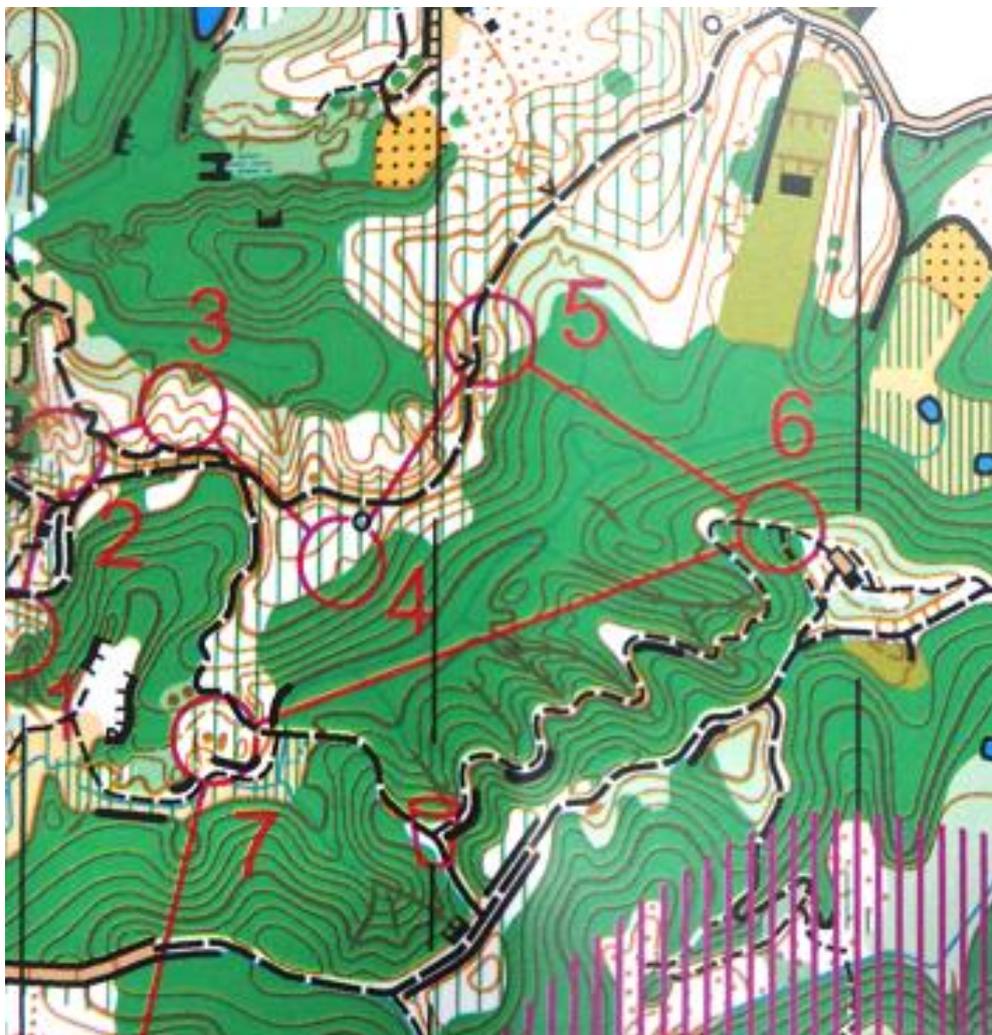
コース図とレースのポイント

「大回りを厭わない(無理にヤブを切らない)」こと、「道の離れ所を確実に決め、確実に確認する(思い付きでショートカットしない)」ことが鍵であるとレース前から考えていた。5→6はまさにその想定が活かしたレグで、大回り(南西の給水所を通過し、さらに南の、カーブの少ない道で北東へ向かうルート)が正解。Dヤブの中を進もうとしてリズムを崩した選手は大きく後退した。なお、松井選手はヤブの中の通りやすい場所を見つけて進み(確かに、旧地図を見るとこのヤブの中にも小道が描かれており、多少の人の行き来はあったのだろう)、後退を免れている。

この時期の台湾の日中は、常に気温35度以上、湿度70%以上を超えていた。終盤は、誰もが体力と集中力が減退した状態でのオリエンテーリングを強いられた。(したがって、涼しい部屋の中で落ち着いて地図を眺めて「簡単そう。これで、なぜ大きなミスをするのか」「このコースなら、アジア選手権に出た選手たちよりももっと早いタイムで走れる」というように見えたとしても、実戦的な意味はあまりない。)まさに「我慢比べ」の大会だった。



コース全体図



明暗を分けた部分の拡大図